

航米日録 卷二

【ハワイを去って太平洋上をサンフランシスコに向い、停泊・滞留後、出航し、パナマ港到着まで】

注意：現代語訳の作成に当たっては、以下の点について心した。

- (1) 「日本思想大系 66 西洋見聞集」(岩波書店,1974 年 12 月)記載の「航米日録」(沼田次郎氏(東大名譽教授)校正)をほぼそのままに現代語に変換するよう心掛けた。
- (2) 玉虫自らが注意書きした箇所は()内に示した。
- (3) 地名、呼名については、沼田次郎氏の校正註を基に現代語に変換した。沼田次郎氏の校正註は《 》内に記載した。
- (4) 校正註について疑問がある点、或いは読者の利便を考えた註を筆者(菅原)の独断にて付加した。それを【 】内に**朱記**にて示した。
- (5) 2 月 2 日午後 6 時頃に、東経から西経へ日付変更線を通過したので、日にちを減ずる必要があるが、そのままになっているので文中の曜日が合わなくなっている。このため筆者(菅原)が日にちを修正した。尚、玉虫の日付を【 】内に**緑記**した。又、旧暦と新暦の対応は、筆者(菅原)が付加した。

旧暦安政七(1860)年2月27日(新暦3月19日) 【2月28日】 晴、東北の風。

東北方向に向かって航行。逆風なので帆を張ることが出来ない。波濤が高く、船上に飛沫が飛んで来ること数回である。それでも船の揺れはそれ程酷いものではない。夜になると非常に風になって来た。

○寒暖計華氏74.5度(23.6℃)○昨日の正午から今日の正午まで100海里○北緯21度58分45秒○西経156度30分30秒

旧暦安政七(1860)年2月28日(新暦3月20日) 【2月29日】 晴、東北の風 午後驟雨。

東北方向に向かって航行。明け方午前4時頃東の方向に月を見る。日本の北緯度数より南に10度ばかり来ているため【緯度1度で約111km離れるので約1110kmの差】、この様になるのだろう。今日も逆風なので船のスピードは上がらない。しかし波濤が静かなので、船は揺れない。さて天候を考えると、今月六日から東北の風が変わってから今日まで風向は変わっていない。晴天が続き雨は少ない。日本では東北の風になれば忽ちに雨となる。と言うことは気候が日本とは異なるのであろう。ただ、時間の経過で変化するので分からない。

○寒暖計華氏73度(22.8℃)○正午まで128海里○北緯22度59分11秒○西経154度

32分55秒

旧暦安政七(1860)年2月29日(新暦3月21日) 【3月01日】 晴、東北の風。

東北方向に向かって航行。午前10時頃小砲・大砲その他槍剣の訓練がある。砲隊ではその技術が熟練していて、到底日本の及ぶところではない。槍剣に至っては子供の遊戯のようで一笑に付すものである。槍は船の中央部分に備え置いて、剣は鞘が無く、シピール《ウィンチ》(これはロクロの大きなもので、艫の部分に設置されている)の上囲いに穴を開けてその所へ指し入れている。実際に鈍剣を見ようとは思わない。槍は鞘が無く、常にワックスを塗って居る。長さはわずか八九尺【3m】程である。今日は逆風なのだが波濤が静かで、テーブルでも同様である。夜に小雨が降る。

○寒暖計華氏71度(21.7℃)○正午まで146海里○北緯24度43分43秒○西経152度42分15秒

旧暦安政七(1860)年3月01日(新暦3月22日) 【3月02日】 晴、東北の風。

東北方向に向かって航行。午後から北風に変わる。碇を揚げて以来始めて帆を張ると言っても、風の強さが定まらず、帆を上げ下げすることが数回になる。午後2時頃、船長が船上で法令の類を読み、士官その他の水夫等に至るまでこれを聞く。

○寒暖計華氏69.5度(20.8℃)○正午まで166海里○北緯26度37分14秒○西経150度24分45秒

旧暦安政七(1860)年3月02日(新暦3月23日) 【3月03日】 晴、午後小雨、北西の風。

東北方向に向かって航行。順風で数帆を揚げる。船のスピードは矢の様に速い。碇を揚げて以来の順風で痛快と言うべきである。午前10時頃、小砲・大砲その他槍剣の大訓練がある。船の左右前後に砲が有り、外敵を防ぐ隊列と見え、槍剣を前に備え、後方を小砲隊で固め、如何にも嚴重であるが、以前に記述したように、槍剣に至っては氣勢が無く、見るものも無い。士官の人は唯指揮するだけで、その作業は専ら水夫等が行う。又、敵の砲撃を防ぐ訓練も有る。船上にポンプ(水を汲み上げる器械である)を設置し、水を流して湿らせる。その動作は緩慢で、特に見るべきものは無い。米国人は大抵器械に頼り過ぎていて、手を使う作業は下手なのであろう。日本の剣槍法を米国人に見せれば、必ずびっくりするであろう。今その訓練を見て一笑に付すのみなり。唯、火砲で遠くの外敵を防ぐことは得意で、もし短兵接戦になったならば彼らに叶うものはないであろう。夜12

時頃から烈風が吹き、船が揺れる。この辺りでは寒暖の差が大きく、綿入れ一枚を着る。

○寒暖計華氏66度(18.9℃)○正午まで110海里○北緯28度14分11秒○西経147度10分30秒

旧暦安政七(1860)年3月03日(新暦3月24日) 【3月04日】 晴、西北の烈風。

東北方向に向かって航行。順風であるが風が激しく船が大いに揺れる。唯満帆に風を受けているので船のスピードは今まで以上に速い。この辺りは北緯30度に近く、天候はかなり変わって綿入れ一枚では尚寒く感じる。夜も同じ様な状況である。

○寒暖計華氏61度(16.1℃)○正午まで230海里○北緯29度57分02秒○西経143度18分20秒

旧暦安政七(1860)年3月04日(新暦3月25日) 【3月05日】 晴、西北の風。

東北方向に向かって航行。順風で船のスピードは昨日と同じ。夕方、風の方が急に東北の風となり、帆を張ることが出来なくなった。夜12時頃、又西北の風に変わり一帆のみを張る。風の方が定まらず、一帆のみになったとの事。

○寒暖計華氏59度(15.0℃)○正午まで248海里○北緯31度41分20秒○西経139度02分

旧暦安政七(1860)年3月05日(新暦3月26日) 【3月06日】 晴、夜小雨、南の風。

東北方向に向かって航行。明け方より南風に変わる。好ましい順風なので数帆を揚げ、波濤を衝いて航行する。そのスピードは目を見張るものがある。夕方、小雨が降る。夜10時頃、急に晴れる。

○寒暖計華氏63度(17.2℃)○正午まで221海里○北緯33度16分33秒○西経135度03分45秒

旧暦安政七(1860)年3月06日(新暦3月27日) 【3月07日】 晴、南の風、夕方小雨。

東北方向に向かって航行。順風で船のスピードは昨日と同じ。午前、水夫、小砲訓練が有る。その銃はケベール銃ではない。形はカービン銃(馬上銃)に似ていて、玉と火薬は元込め式になっている。米国名をシャープライフルと言う。極めて使い勝手が良い便利なものである。唯、水夫等の訓練は熟達していないと見え、指揮官が怒り出す場面が数回あり、船上で前後に行進すること2時間ぐらいで終了した。訓練が上手でない事については、日本人一行も笑ってしまうことが多かった。午後4時頃、小雨が降ったが直ぐに晴れる。夜午前2時頃、北の方

向に赤色の発光を見る。中央が白色でその周りが煙のように模糊として赤くなっている。暫らくすると色が薄くなった。これは何なのか分からない。日本人の性格なのか大変仰天したが、米国人は平然としている。我々日本人が驚くのを見て、「日本ナイ」と言う。このため、日本各地では見られないものであろう。米国名を「ノルフライト」《オーロラのこと》と言う（オランダ語でノールトリフトと言う）。これ北光と言うもので、北方ではよく発光するという。まだどの様にして発光するのか分かっていないと言う。一説には陰気が積鬱して発光すると言う。北方に限らず、南方でも極まれに見え、別に怪しむものではないと言う事である。
○寒暖計華氏63度(17.2℃)○正午まで263海里○北緯34度02分○西経130度06分05秒

旧暦安政七(1860)年3月07日(新暦3月28日) 【3月08日】 晴、東北の風、夜雨。

東北方向に向かって航行。船のスピードは昨日と同じ。午前10時頃、水夫、小砲訓練が有る。今日は北緯36度まで来た。サンフランシスコ近傍の山が見えるのではないかと使節団一行は全員首を長くして待ち望んだが、夕方になってもまだ見えない。夜10時頃から雨が降り始め、辺り一面模糊として遠くを見渡せない。夜12時頃になって遠くに船の明かりが点々として輝いているのが見えた。ポーハタン号の船上から合図の烽火を出し、且つ照明弾を発した。
○寒暖計華氏60度(15.6℃)○正午まで270海里○北緯36度57分19秒○西経125度26分15秒

旧暦安政七(1860)年3月08日(新暦3月29日) 【3月09日】 雨晴不定、東北の風。

東北方向に向かって航行。逆風なので帆を揚げない。今朝になって左右の群山が連連と見え、船のはるか後に二つの小島が有って、海峡が東に見える。この所で日本と米国の国旗を掲揚した。約2時間ばかり航行するとサンフランシスコから小船一艘が来た。15日前に咸臨丸(かんりんまる)が既に着岸していたとの報告があった。更に航行すること半里【約1km】位で港口に至った。左岸に灯台があり、右岸に国旗が掲げられている。港口を過ぎると右の岸壁の下に砲台が有り、嚴重に警備されている。また半里【約1km】過ぎると港内となる。港は非常に繁盛しており、諸国の船が数多く係留されていて、その数がどのくらいなのか分からない。港内へ入ろうとするとき、スクナー型【玉虫は船名と記述したが船型と校正有り】の様な船が一艘、ポーハタン号の側を過ぎて日本の国旗を高く掲げ、祝砲を打ち鳴らした。ポーハタン号でも碇を下ろした後、祝砲を打ち鳴らし、且つ音楽を演奏した。その後暫らくして陸上から士官と見られる人達が装束に身を整えて数人来た。その応対は約3時間ばかり続いて終了した。この場所には上陸しな

いで、少し航行して米国海軍造船所のメールスアイランド《Mare Island：メアアイランド》と言う所に来た。ここには軍艦の製造所が有り、咸臨丸の破損箇所を修復していた。この間が30里【約56km】あると言われている。日本の14里弱に相当する。この場所の風光は明媚で、まるで画の様である。サンフランシスコ港は川港で、川の名はサクラメント川と言う。如何にも大河で、港南は荒涼として一山も見えない。東北の方向に二つの小島がある。北側の一島に砲台が設けてある。ここから上流に少し遡ると川幅が狭くなり、大体幅は一里1.6kmであろう。兩岸が良く見えない。ポーハタン号は北西岸に沿って航行する。岸の上は皆山になっており、草木は青々として繁茂している。大木は見当たらず、小木のみ色々の形の木々が生えている。遠望すればまるで庭園のようである。ここを過ぎ半里【約0.8km】程航行すると西北岸に頑丈な家が二、三軒見える。どの様な家なのかを尋ねると牢獄であるとの事。何故この辺りに建造するのかと考えてみると、後は山になっており、前は大河で囚人が遁走することを防止するのに格好の地だからと思える。米国人も同様と考えているのであろう。そこより北へ斜めに航行し、一二里【約2～3km】程の所に小島二、三島を見る。これを過ぎ一里【1.6km】航行すると東岸に家が二、三軒見える。その側は皆平山で、草が青々と生えている。牛馬が群れているのを見る。又少し行くと右に一筋の川が有る。この所はいわゆるサクラメントの本流である。この辺りの川幅の広いことは、西北の山を遠くに見ることからも分かるが、どの位の距離であるかは分からない。左側に小島があり、メールスアイランドと言う。この島を西に斜めに回ると、500-600mして製造所がある。まだ碇を下ろさないで二三丁【200-300m】航行すると、大砲を打ち鳴らし日米両国の国旗を掲揚した。咸臨丸でも日本の国旗を高く掲揚した。且つその所に設置していた浮砲台(船に設置した砲台で移動可能)で頻繁に空砲を打ち鳴らす。終わって咸臨丸で国旗を途中まで下げる。これは仕来り・合図なのであろう。午後2時頃碇を下ろし、祝砲を打ち鳴らして音楽を演奏する。碇泊している場所は水深が深く、船舶は直ぐに岸壁に接岸し、岸から舷へ棧橋を掛けて出入りしている。最初、咸臨丸から与力・同心各一人、他にこの島在住の米国人が小船で遣って来た。碇を下ろした後、木村摂津守も従臣を引率して遣って来た。咸臨丸の航海の状況を聞いたところ、正月15日に碇を揚げて出航して以来、連日の風波、殊に25、26日頃の風雨が烈しく怒濤が船上に飛来し、これがために三番目のマストが破損し、殆ど船が破損するのではないかと思われた。その後も風波が烈しく、船上は何時も川の様で、潮水が有り、一行は肝を潰すほどで生きている心地がしなかったとの事。又、湿気がために病人が多く、サンフランシスコ港に入るまでに咸臨丸の水夫が一人亡くなった。その他、二人が病気になり、サンフランシスコで療養することとなったとの事である。その悲惨さは聞くに堪えないものであ

る。我々の一行も同様に風波のため実際に苦難をした経験があるため、尚更心痛むものがある。さて、或る御仁が言うには、船中では米国人の様に羅紗の服を着なければ、湿気を受け易く、雨が降れば容易に乾かないため、病気になったのではないかとの事。これを言った人物は洋学かぶれで、取るに足らない説である。日本の服を着ていても、その始末を良くすれば、湿気を受けない様に出来るし、且つ、病気になったのは常日頃の怠け癖で衣服を清潔にしていないからである。さて、夜8時頃、太鼓・小鼓に笛を交えて鳴り、それが終わったら砲が発せられた。碇泊中の仕来りである。

○寒暖計華氏60度(15.6℃)○昨日の正午より今日の午前10時まで150海里○北緯37度47分○西経122度21分

旧暦安政七(1860)年3月09日(新暦3月30日) 【3月10日】晴雨不定。

滞船【サンフランシスコ】。午前10時頃御奉行、その他の属官が木村摂津守のホテル並びに海軍造船所所長のカニングムの私邸へ行く。新見豊前守は刀を納める柄袋を忘れ、幸いなことに、自分【玉虫】に取りに行くことを命じられた。帰り道、島の情勢を探ろうとしたが出入が厳禁されていて、時間が掛かって遅刻するのを恐れ、早々にその場を過ぎてしまったのは真に残念であった。その概要は、以下の通りである。所長の私邸は非常に美しく、珍しい木を用いて建てられている。周囲は瓦石を積んだ塀を巡らし、如何にも堅牢で、左右に花壇が有る。草花は爛漫と咲いているが、皆見慣れぬ草花で、その名前が分からない。住居の有る場所は極めて閑静であり、まるで俗世界を離れた仙人の住む仙境の様である。ここを去り、山上に登って一望すると、小島のため全てが見える。田畑は無く、多くの草が繁茂しているだけである。しかし造船所と見え、横七間【約13m】、縦二十間【約36m】の土蔵の様な家が7、8軒、他に人家が5、6軒あるだけである。高さは二階建て、或いは四階建てである。その他は見るべきものもない。このところ晴雨が定まらず、一日中風向が変わる。何時も雨傘を手放せない。

○寒暖計華氏61度(16.1℃)

旧暦安政七(1860)年3月10日(新暦3月31日) 【3月11日】晴雨不定。

滞船【サンフランシスコ】。午前8時頃音楽を演奏する。平日と違い、太鼓・小鼓を交えている。午後、御奉行等その他の従臣に至るまで、サンフランシスコ港に行く。別船に乗って島を出る。一里【1.6km】ばかり行くと、全天が暗くなり雨が降ってきた。且つ、東北の風が強くなり、寒冷が身に染みて、風景を見ることが出来ず、船中に留まっていた。ここから四五里【約7km】ばかり航行すると雨が漸く晴れて、皆喜んで船上に立って一望すると、一昨日の進路と違って、東南岸

に沿って航行する。山々の風景は前岸と同じで、珍しい風景は目を見張るものがある。又、一・二里【約2.5km】程航行するとサンフランシスコ港に着いた。直ぐには碇を下ろさず、港内をゆっくり音楽を演奏して周遊すること2、3回。これはきっと港の形勢を示すことなのであろう。碇を下ろした後、米国人が数百人岸上に雑踏していて、日本人を見に来ている。我々は下船し、馬車に乗ってホテルに行く。馬車の早いことは、瞬時にして20町【約2km】走ることである。その間にどのような風景を見たということであろうか。早々に風景が過ぎ去ってしまうばかりである。午後4時頃、夕食を食べる。いずれも米国人の料理で、味は美味しいとは言えないけれども、空腹を満たすには十分である。その中味を以下に記す。

○干しパン(乾いたパンである) ○氷水(右の二品は始めからテーブルに備えてある) ○吸物(白色の大皿に入っていて、味は美味しいが匂いがある。品物が何なのか分らない) ○鮭(餡かけに似て、油くさい匂いがある) ○牛(塩煮であるが、葛の粉を掛けた様で、油くさい匂いがあるが食べられる) ○豚(五升芋に小麦粉をまぶした物を入れ、いずれも油くさい匂いがある) ○小芋(むかごに同じ。皮をむいて塩煮にしたもの) ○菜浸ス(是又塩のみで、味は美味しくない) ○飯(日本と同じ) ○蒸餅・饅頭(中に餡が入っていて、味は酸っぱい。葡萄で作っているとの事) 右のものは大皿に盛って、フォーク(さじに似て、四本またの裂けた様なもの)・ナイフ(包丁の小さいもの)・スプーン(食さじ)を人数に応じてテーブルの上に並べ、食事のときにこの三品を使用する、箸は用いない。最初は口に合う味の食べ物が一品も無かったが、是を常食とすれば【日本の】穀食と同じであろう。自分【玉虫】は三年前に蝦夷地へ行ったことがあるが、蝦夷人が干魚をセイウチの油に浸して食べているのを見て驚いたことがある。後程交易を行っている運上屋の人に聞いたところ、最初は口に合わないばかりか、このために気分が甚だ悪くなったが、一月も過ぎると慣れてしまい、油を用いないと却って食事が出来ないほどであったとの事。是と同じで、米国の食事と言っても、空腹を凌ぐのであれば穀食も同様に、慣れか不慣れかの違いなのだろう。外国へ来て飲食に苦しむのは、井底の蛙だけで、一步も外に行くことが出来ない者である。笑うべきことである。有志の士は必ずやこれらに苦しむことが無いだろう。夜雨。

○寒暖計華氏59度(15.0℃)

旧暦安政七(1860)年3月11日(新暦4月01日) 【3月12日】朝曇、午後雨。

昨晚、サンフランシスコ滞留。今10時(日本で言う巳牌半) 米国人との応接に關しないその他の従臣は帰船すべきとの事になった(仕事に關係するもののみと言うことで、自分は帰船する)。このため、面々は帰船する前に市街を見学した

いと思い、午前8時過ぎにホテルを出たが、暫らくしない間に遠くへ行くことが出来なくなってしまった。僅か七八丁【700-800m】行った所で10時になろうとしていた。やむなく、早々に帰る。さて、僅かの時間の市街見学であったが、サンフランシスコの繁栄の粗方は知り得るものである。米国人が雑踏して日本人を見ようと通りを埋め尽くす様は、かつて日本に米国人が来たときと同じである。このサンフランシスコの地図を求めようと書店で尋ねたが、言葉が通じないので手で丁寧に示したが、店員は分らず仕舞いであった。止むを得ないことである。この地に来てその形勢を知らないのは全く残念である。ホテルの北側に山があり、この山に登れば、大略の形勢は分るであろうと思い、短時間であるが行ってみた。不幸にして雨が降り山腹から引き返してきた。その後、ホテルから車馬に乗り、十五六町【約1.5km】離れたところの海岸から乗船する。雨のため、風景を見ることが出来ない。船上は楽しみがない。午後4時頃メールスアイランドに着く。混雑していて休むことが出来ない。夜になって漸く平生に戻る。昨日、御奉行達がサンフランシスコに行こうとして別船に乗り移ったとき、船中で太鼓・小鼓・鉦を交えて音楽を演奏した。そのとき、当島の浮砲台で祝砲が発せられた。ここから一町【100m】程航行しポーハタン号でも音楽を演奏し、祝砲を発した。そのときは一発で終わってしまった。これは何故なのであろうか。後刻、石川完吉と言う者(御勘定組頭森田氏の従臣)の話では、始め一砲を発したとき、誤って当島在留の所長宅に当たってしまい、直ぐに騒動となって終わってしまったということである。所長は飛び散った砂石で半身が損傷し、その所で即倒したとの事である。帽子は粉々になって四方に飛散し、地面に鮮血が流れたとの由。そのときの対応は実に驚くものであって、所長が即倒すると直ぐに水夫数人が走って行って邸宅へ上がり、少しもその場所に留まらずに応急処置をした。このため、直ぐに静かになり何事も無かったかの様であった。所長はそのような重症であったが意に介せず、顔色一つ変えず、平然と落ち着いている様子で神色自若とした態度で何時ものようであった。彼が言うには「この度の重傷を受けたことは、殊更憂れ得ることではない。40年前、メキシコとの戦いで一命を失うほどであったが、幸いに一眼を失うのみで済んだ。四十余年の年月を永らえたのは天幸と言うべきである。今たとえ一命を失ったとしても、遺憾と思うことは無い」との事。椅子へ腰を掛けて泰然としていたとの事。この話を聞いて、非常に驚き、通常の人でこの様な精神の持ち主なのだろうか。もしそうであれば、歴史上の人物として歴史に載せても恥じない人である。米国の英雄豪傑の多いことは、このことから推察出来よう。所長の名前はカニングムと言う年齢63歳の人である。

○寒暖計華氏60度(15.6℃)

旧暦安政七(1860)年3月12日(新暦4月02日) 【3月13日】 陰晴不定、夜晴。

滞船【サンフランシスコ】。今日は雨が降るのかと思ったが、雲が低く垂れ込めて鬱々とした日である。夕方頃、御奉行達が帰船する。一昨日から船中へ石炭を積み込み始め、今日になってもまだ終わらない。この石炭を積み込むのに、陸



上から車で運んでいる。この車は の様な形で【現在の猫車】、年寄りや若者でも自由に操れる。一人一車で、数十人で運んでいる。そのため、暫らくすると数百貫目【1.8 ton】位になる。その車の製造は雑であるが、非常に便利である。日本では見たことも無いものである。夜になり、月光が艶やかで美しく輝いている。今日御奉行達がサンフランシスコ市長舎へ行った時、部屋で音楽を演奏して饗応された。その盛大さは目を見開くものであったと言う。自分は先に帰ったので、その光景は見えていない。

○寒暖計華氏60度(15.6℃)

旧暦安政七(1860)年3月13日(新暦4月03日) 【3月14日】 晴。

滞船【サンフランシスコ】。今日は初めての快晴で、船上の湿気が乾く。

○寒暖計華氏62度(16.7℃)

旧暦安政七(1860)年3月14日(新暦4月04日) 【3月15日】 雨。

滞船【サンフランシスコ】。ポーハタン号の司令官は皆に先立ってパナマ港に行こうとして、別船に乗船して出帆した。出帆を祝すとして司令官が乗り移ったとき、ポーハタン号の船上で祝声を三度揚げて、且つ音楽を演奏した。又、碇を揚げたときにも前の様に祝声及び音楽を演奏した。当島に設置されている浮砲台で祝砲が発せられる。これは米国の慣例と見える。司令官が皆に先立って行く理由は分らないが、パナマ港及び政府への報告のためと言う人が居る。

○寒暖計華氏57度(13.9℃)

旧暦安政七(1860)年3月15日(新暦4月05日) 【3月16日】 晴雨不定 南東の風。

朝、快晴。午前10時頃、突然雨が降ってきた。午後碇を揚げてサンフランシスコ港迄来た航路を戻る。碇を揚げた際、ポーハタン号で祝声を挙げたが発砲はしなかった。唯、浮砲台で発砲するのみであった。サンフランシスコ港で碇を下ろす。米国人が食料を積み込む。夜は快晴で月光が燦然と輝く。

○寒暖計華氏54度(12.2℃)

散汎思斯哥形勢【以下「サンフランシスコ」と記する】

その都府は米国合衆国の西岸に在る新カリフォルニア州の港である。北緯37度48分、西経122度24分。海門は西南の太平洋に面し、左右は皆山続きで、一山が終わる頃に別の山が出てくる。その間の距離は一里【1.6km】ばかりで、砲台が3箇所有る。二つは海門の兩岸に築き、各灯台が設置されている。これは通過する船舶の標的とするためであろう。遠くで分からないが、皆瓦石を敷き、レンガの塀を高く築いて、砲門が三層になっており、東西方向には一層七門、北側には一層十五門、合計八十門強である。いかにも嚴重である(これは右岸の砲台のことである)。もう一つは港内の島上に有る。兵卒は3000人居て、交代で砲台の任務に当たっている。兵卒の住居は砲台の側にある、練兵場が設置されている。給料は一月11ドルである。海門を入れて20町【2km】程南側斜めに航行すると、そこがサンフランシスコ港である。港は東北方向に面して、東は二里【約3.2km】程離れて山がある。南は平坦で山が無い。北側は一里【約1.6km】で前岸は皆山になっている。この間に二つの小島が有る。西北にある小島は、前に述べた砲台である(島名はアルカトラスと言う)。このサンフランシスコ港は、サクラメントと言う川が海に流れ注ぐ所で、極めて大きいものである。港内は深いために、直ぐに船舶は接岸できる。浅い所には処々棧橋を設置して、使用勝手を良くしている。陸上は皆山で、麓から山上に至るまで美しい家屋が軒を連ねて建てられている。南北に49の通り、東西に32の通りがあり、又南東斜めに縦26の通り、横16の通りがある。諸外国人が来て居住し、貿易をしている。今現在の人口は10万人になり、練兵場・学校が数箇所有る、又、劇場・遊郭が所々にある。リェーテ国(《何処のことか校正者分からず》)の法徒・人民を勸化するため、始めに教会を設置し、法教を説いて民を説得した。1852年になり、教会の数は18箇所までになった。その盛況であることは実に驚くべきことである。この府の成り立ちを考えてみると、今から僅か12年前、西暦1848年にカリフォルニアが初めて米国33州に加わった(《校正者註：カリフォルニアが州となったのは1850年で、玉虫との認識に若干の差がある》)。1849年5月頃までは、このサンフランシスコの戸数は僅かに30～40軒に過ぎなかったが、その近傍に莫大な金鉱が発見されてから、日を経ずに戸数が増加していった。1849年9月01日(4カ月の間)になって、既に家屋・仮舎・小舎など総計500舎(【原文は「人」となっているが「舎」が正しいと思われる】)程で人口は5000～6000人になった。その金鉱を発見した元を正すと、実に偶然であったとの事。1848年2月末に、カピタン朱篤児(《ドイツ人生まれでカリフォルニア在住のシュターと言う人》)と言う人が居て、使用人をニューケルケチ村に移住させたときに、使用人が川を通そうと掘削していたときに偶然金鉱に当たったとの事。このことが忽ち諸

方に伝播して、それを聞いた者達が利益を得ようと肉に蠅がたかるように各地から人が集まったとの事である。日を経ずして鉱夫が千人ほど来て、その仕事が活発になった。又、商人・行政士・町の役人・医師・職人・船長・水夫・白人・黄色人・黒人等が競って遣って来て、各の商売をした。この様にして、寒村であった地が急に繁華な町になって行き、大劇場を開設するようになった。まさに盛んなる哉である。金鉱はカリフォルニアの処々に有って、平地であつたり、北部のオレゴン州の近傍であつたり、「タラマト川(《校正者分からず》)」にあつたり、サンホアキン川とサクラメント川との間から砂金が遠く流れ出し、シェラネバダ山脈と北緯41度より北緯37度(西洋里程で350里=約560km)の間にある。この辺りの地底で金鉱脈が無いと言うことは無い。近くには白石の間に金が挟まっているのを見たり、かなたに金の薄片或いは顆粒を見、或いは他の金属に混ざっているのを見る。1849年10月になって鉱夫凡そ2万人居り、採掘した金は僅かに1億ギルダーであつた。1851年正月末(開鉱してから33カ月を経過)では、凡そ3億7500万ギルダーである。諸外国人がここに来て、一攫千金、一山を当てようとして却って貧困になり、財産を失って去って行った人は数千人に上る。さて、偶然に富を得た人も少なからず居ると言う。現在では海を越え、陸上を駆って諸方から居所を移動して遣って来る人達が後を絶たない。中国から移住してきた者千人余り居ると言う話である。金山を開鉱してから始めの4カ月間で掘り出した額は凡そ、212万5千ギルダーであつたが、1852年の初めには既に毎月2,250万ギルダーに上り、又、1848年にサンフランシスコ港に来航した船舶は僅かに9艘で、その内4艘は隣港のモンテネグロ港やサンペリエ港(《校正者は何処のことか分からないとの事》)所属のものであつた。1852年の正月から10月までには827艘、同12月までに既に2千艘が來港したとの事である。合衆国の内、新約克(ニューヨーク)、勃斯頓(ボストン)の二都府を除いては、租入の多いのはこのサンフランシスコ府を超える都市は無い。1852年正月一日から10月31日迄の税金は390万ギルダー。この間の來府旅客は58,851人、出府旅客は19,575人。永住の人口3万人、現在では10万人を下ることは無い。したがって、商店・工場等もこれに準じて当時より3倍に増加しているのだろう。僅か7年間にして、既にこの様になっている。数十年後には、繁華富盛は現在の10倍になっているだろうことは疑いないことである。さて、このカリフォルニアであるが、1836年迄はメキシコ国はこれを無用の地として放置していたが、米国人が土地を購入して港を開き、鉱山開発を始めてからこの様に繁栄し、全世界の金の価格を動かすようになった。ここに至って、メキシコ人がたとえ臍(ほぞ)を噛む思いをしてもどうしようも無いことである。

風俗

このサンフランシスコの街は前述の如く、12年前は極めて寒村であったが、1848年の金鉱の発見以来、日を経ずして隆盛になり、諸物の価格が高いことや、高価な物を製造するのに巨費を投ずるのを厭わず、良材を使用して家屋を作り、巨大な倉庫を作ってそれらの色をカラフルに仕立て上げ、大抵中国風にしている。その後、度重なる火災に逢い、忽ちにして烏有に帰す結果となった。このため、米国人は防火策を考案し、災いを転じて福となしたのである。その造営法は、レンガ或いは白石を積んで四壁を作り、三階或いは五六階建てとして、鉄、石、或いは木を用いて柱としている。土床に平たい敷瓦用の石板を敷き、室内の内装には木材を用いているが、黒漆或いは白漆を塗り、又、ガラス、金石で飾り、極めて綺麗である。一家の造築費用は凡そ1万ドルを下らないものである。高いものでは100万ドルになる。造築時の一時的な費用は多額であるが、永久に持続するものなので、殊に石造りの家は火災の難が少なく、仮に出火しても延焼の危険性が無い。日本使節一行がサンフランシスコのジャクソン街のホテルに宿泊していた際、しきりに半鐘が鳴らされて喧騒する場面があったが、門前に隣接する帽子店から失火したとの事。早速行ってみると、火焰が上がり黒煙が空を覆うばかりであった。消火の兵卒が急に梯子を掛け、屋上に登ってホースで自在に水を噴霧（いわゆるポンプである）する。屋内の木材で作られた場所のみ焼失し、石造りの天井及び四方の壁はそのままであった。殊に不思議なことは、隣家では少しも騒然とならず、夫は本を手にとって屋上から火事の状態を見つめ、妻は子供を抱いて談笑して火事の状態を見ている。その後、米国人の挙動を見ると、同様なものであった。この様であるので、石造りのメリットは言を待たないものである。

サンフランシスコは諸国交易の場所であるが、ブロンドの髪でブルーの瞳（紅毛眼眸碧色）の人が多い。女性の衣服は貴賤に関らず、腰にフープスカートを着用し、頭に種々の飾りを付けている。旅客を良く待遇し、ホテルの対応は殊のほか、慇懃である。副使村垣淡路守の従臣である福村磯吉と言う人（参州吉田【現愛知県豊橋市】の出身で、西洋の器械に詳しい）が、或る米国人に蒸気機関を利用した機械について質問したところ、彼が知っている機械を残らず説明したり、或いは図面を示して丁寧に説明してくれた。その後、彼の子供を連れて来て合わせてくれた。米国人が親切で、快活であることはこの一事からも分かり、その習慣の概要を知ることが出来るであろう。婦女子

と言っても外国人に接することを恐れず、珍しい物、奇品などを示し、パーティを開くとき【原文は「徘徊するときは」となっているが意味が取れないのでパーティと訳した】は近くの家を招待し、応接に暇が無い。唯、物価が高いので貧者は手が出ない。大略は以下に記すが、市街は車馬の往来が頻繁で、車馬の乗員の多いものは十人乗り、少ないものは四人乗りである。左右にガラス窓が有り、車床の飾りは悉(ことごと)く美しいものであり、ハワイのサンドウィッチ島でのものの及ぶところではない。このサンフランシスコ港は金鉱に近く、且つ湾曲した大きな港であるので、碇を下ろすのに便利でヨーロッパや米国の商船が隊列を作って遣って来る。目視するに数百艘がぎっしりと係留されている。合衆国の諸州都、特にニューヨークとは盛んに往来が有り、二隻の小蒸気船が常時対応しているのは、日本の常飛脚と同じ類である。21日間にパナマから往来し、一艘は17日間にニカラグア湖《原文：ナイカラキユア湖》から往来する。フランス・イギリス・オランダ等の人々が此処に転居することが最も多く、中国人も一万五千人ばかり居住している。中国人は市街の一区画を作り、唐人町と呼ばれている。彼らは雇い人・使用人・鉱夫となったり、或いは小商店を開いている。上手に豆腐を作り、その味は美味である。中国人の店に行くと夫婦が出て来て、茶菓子を出す。日本の風習と同じである。大抵、中国人は瘦細く汚れていて、西洋人により非常に卑しめられており、アフリカの黒人と同じ様に扱われている。又、電信機を設置し、サクラメントの諸所と連絡が取れるようになっている。急便が必要な人はお金を出せば、数百里の遠隔地でも一瞬のうちに連絡が出来、直ぐに用事を済ませることが出来る。その便利なことは言うに及ばない。

時候

サンフランシスコ港は、北緯37度48分の所に位置し、気候温和である。唯、太平洋に面する所は湿気が凄く、11月より翌年4月までの間は雨天が多いと言う。自分が此処に来たのは3月中旬で、米国では4月に該当するが、寒冷で綿入れ二枚を重ねて着ていた。一日の間に晴れたかと思うと忽ち雨に変化することは、ハワイのサンドウィッチ島を思い出させる。しかし、全ての草花が爛漫と咲いていて、風景はあたかも日本の陰暦2月過ぎの様である。

草木

サンフランシスコ港の近山に、クヌギ・ホウ・カシの木々が生えており、又、大麦を植えている。フラーブレンと言う鉢植えされた植物(《校正者は分からず》)の葉は、イワレンゲに似て、幹は慶天草に似ている。又、「リレウム」

が有り、葉は菊に似て幹は南天に似ている。又、ロースホースが有り、ハマナスに似ている。これらの植物は皆ホテルで見た物であり、実際に土地の産物であるかは分からない。草は日本では見られないものが多い。米国人に尋ねたが名前を知らないと言う。野原は爛漫として、その風景は非常に美しい。野菜は「ホネンス」と言う名前のものが有り、菊葉の様で美香がある。又、ボスネと言う根が白い人参の様な葉はウドに似ている。又、カエーツペと言う(《キャベツと推測》)、葉はボタンに似て密集して生えており、形はフキの様で花ではない。又、レワケスと言う、葉はニンニクの様で太い幹は里芋の茎の様である。又、カーレブラワ(《カリフラワー》)と言う、葉は菜の花の様で大きく、花はフキに似ているものがある。その他、種々の野菜があるが、その名前を聞き出すことが出来ない。松・杉・梅・竹・桜・桃の類は一切見かけない。

生物

動物は、牛・羊・大鹿・鹿・豚・猪・熊・カワウソの類が多いと言う。但し、見たことが無い。犬・猫はほぼ日本と同じである。唯、犬に大小あって、大きいものは高さが三尺五六寸【約1m】、長さは五尺【約1.5m】程。中は日本の犬の大きさと、耳が垂れ尻尾は細い。小は高さ一尺五寸【約0.5m】、長さは二尺【約0.6m】程である。鳥は、カモ・ニワトリ・アヒルの類が多い。川にコガモが点々と居るのが見える。他にカナリヤが調子良くさえずっているのを聞く。これは恐らく他から買い求めて来たものであろう。ツバメ・スズメ・カラス・トビの類は見かけない。魚類は、カレイ、エビ、サケ・カニの類、他にパイと言うものがある。このパイは形がニシンに似て、味も同様である。シトズンと言う形がサメに似て、味は最も美味しいものがある《パイもシトズンも校正者は分からないとの事》。タイ・ヒラメも居ると言うが、自分は見えていない。昆虫は、時期がまだ温暖でないので冬眠中なのか、一切見えていない。

貨幣

この地には既に金鉱があり、又市街に広大な造幣所があるので、しばらくして数多くの貨幣を製造する(訳書に、1ミニート《1分》間に貨幣70個を作成、一時間に4200個を作成する。これから推測すると一日に50,400個を作成することになる)。これは皆蒸気機関を用いた器械を使用するからで、その早いことはかくの如きで、貨幣が最も多い。このため、貨幣が却って安く、物価は高騰している。これは自然の摂理である。

物価

物価は極めて高く、5～6ドル持っていると言っても、良品一つを買うことも出来ない。銀貨の価値の低いのは、諸外国で何処も同じであるが、日本とは非常に違っている。現在、5～6ドルを日本の貨幣に当てはめれば、方銀《一分銀》の3～4枚に相当する【原文では「両」と有るが「枚」が正しいと考えられる】。この金額は貧乏人は持つことが出来ないものである。しかるに、この様になるのは実に不思議なことである。聴くところに拠れば、大略は以下の様である。

一	米一升	1ドル
一	大豆三合	25セント
一	酒五勺	50セント
一	卵12個	1ドル
一	縮緬(ちりめん)一尺	1ドル
一	ゴロフクレン三尺	1ドル 《オランダ語 grof grein。毛織物》
一	時計	3ドル～700ドル
一	豆腐一丁	25セント
一	遊女一人	5ドル～20ドル
一	サケ一尾	5ドル～15ドル
一	車馬一人当たり	3ドル
一	渡船一人当たり	1ドル(ポーハタン号から陸上まで約1km)

家宅

ホテルは海岸から凡そ二十丁【2km】離れていて、町名チョキソンストリートと言う《ジャクソンストリート》。ホテル名は、インキルネショナエルと言う《インターナショナル》。非常に大きな建物で、五階建てである。各階では部屋数を10に分け、総計136の部屋があり、各部屋には皆ベッドが有る。そのベッドはハワイのサンドウィッチ島のものと同じであるが、帷(とぼり)



の上端に小さな玉を結んでベッドの四隅に吊るしてある。その形は、
の様である。又、テーブル上に洗面器・大鏡・マッチを設置し、更にタバコ盆或いはお茶を出さず、このため日本人はタバコを喫煙することが出来ない【文章が途中欠落しているのか、意味が通らない】。米国人は、平生葉巻タバコを喫するので、喉が渴いたときは水を飲む。このため、上記のようになっている

のだろう。何事にも便利を旨としているので、各部屋の隔壁に銅線を配線し、これを引くと直ぐにルームボーイが遣って来る。各層の壁の上に、部屋数に応じて呼鈴を設け、その呼鈴の番号を小片板に記している。上の部屋でこの銅線を引くと、呼鈴が直ぐに鳴り、どの部屋で用事があるのかが分かる。又、各階銅管で水を流し、常にネジで水口を閉止している。水が欲しい時は、このネジを回すと直ぐに水が出る。窓は皆ガラスである。席はカセン、灯火はガスを用いている。これも各部屋に銅管を引き回し、常時ネジでガスを止め、点火すれば直ぐに燃える。その便利さは驚くべきことである。一階は食堂になっていて、ホテルの支配人が此处に居る。その長さは凡そ十七間【30m】、幅七間【13m】で、三列に長いテーブルが置かれ、テーブルの周りに椅子を並べている。一テーブルに60人、三テーブル合計すると180人が会食出来る。盛んなる哉。

海軍造船所メールスアイランド形勢

サンフランシスコ港から約10里(40km:米国30里)程遡ると一小島が有る。これがメールスアイランドである。周囲は一里【約4km】で、草が繁茂し、木は一本も生えていない。この場所に船の製造所があり、ネビヤールド《Navy yard: 海軍造船所》と言う名である。島内に蔵庫或いは加工所が凡そ6～7棟、その他に、当所在住の米国人の家が5～6軒有るのみで、寂しい所である。咸臨丸がこの場所で碇を下ろし修理していた。岸は全て石で緻密に積まれており、水深が深く、どの位であるかは分からない。大鑑・巨舶が直ぐに接岸出来、常時栈橋を掛けて陸上と往来出来るようにしている。水深が浅くなる恐れがあるので、ごみを捨てることを禁止している。違反する者は3ドルの罰金が科せられる(この説明は分からない)。南岸から少しばかり離れて、物見櫓の様な高い建造物を作り、ゆっくりと大鑑が出入りすると、中を隔離する。幅は僅かに二三間【4～5m】で、船を修復するときは櫓から【船を】引き揚げ、水中には長い箱の様な物を浮かべて船をその上に載せれば、箱の浮力で船が自然に水中を離れ、この様にすれば船底を自在に修復することが出来る。これは本当に不思議と言うべきである。前岸は全て平山で戸数20～30軒、いずれの家も美しく見える。この場所はワレヨオ《バレーオ: Vallejo、湾の北部サンパブロ湾の東北岸のこと》と呼ばれている。サンフランシスコから此处までの間、遠望したところ一つの田畑も見えない。唯、牛馬が群れているのが見え、これらの牛馬を牧畜しているのは、日本で五穀を作るのと同じ感覚なのだろう。この所に一隻の大鑑があり、非常に頑丈で砲門が60も有る。その形はフレカット《蘭語fregat、英語frigate》に似ていて、甲板

は全て板張りで、大きな家の様である。これは浮砲台として使用されている。船の出入りのときは必ず祝砲を発する。一旦事が起これば左右に移動して防衛し、非常に便利なものであると言う。

旧暦安政七(1860)年3月16日(新暦4月06日) 【3月17日】 晴。

サンフランシスコ滞船。快晴で一点の雲も無く、山の景色もはっきりと分かる。風景ははなはだ絶景で温暖である。着岸以来この様な好天は無かった。上陸しようとしたけれども厳禁で、止むを得ず船上で日を過ごしていたが、この事は実に遺憾である。午後、炊夫一人規律に違反して、手枷(てかせ)を掛けられた。或る人が言うには、【炊夫が船から降りて】サンフランシスコに上陸して酒を飲んだときに英国人と喧嘩したとの事。この様な愚かな行為により、上陸が出来なくなることが我々に及ぶのも止むを得ない事である。午後4時頃、船中の人員の確認が、明日出航なので何時もより厳格に行われた。始め、太鼓・小鼓を打ち鳴らして人数を揃え、その側に船長・士官兩人が並列した。士官の一人が中央に立ち、その側に一人の医師が沿い、一人ずつ名前を呼ぶとそれに応答して船長の前を過ぎる。彼等に病者が居れば、医師がその旨を船長に伝える。厳密と言う事である。船長の前と言ってもただ脱帽するのみで、礼拝しない。平日も船長・士官の別無く親しく接し、たとえ水夫でも船長を特別に重んずるということは無く、また船長も威勢を張ることはしない。全く同輩の様である。このため、情交親密で、有事の時は各人がその力を発揮してお互いに助け合い、悲しい出来事があれば共に涙を流して悲嘆する。日本とは相反することである。夜、月光が美しい。

日本では礼法が厳格であり、将軍や藩主などには容易に拝謁出来ず、まるで鬼神の様である。これと同じ様に、少し位のある人は威厳を張り部下の者を蔑視して情交が薄く、凶事があっても部下に対して悲嘆の顔を見せない。これは米国と大いに異なるところである。この様であれば、万一緊急の事態が発生したとき、誰が全力を尽くすというのだろうか。これは日本国内の安泰が長く続いた弊害だろう。嘆かわしいことである。礼法が厳格で情交が薄いよりは、むしろ礼法が緩くても情交厚い方が良いのではなかろうか。自分はあえて夷俗【外国人】を尊ぶと言う事ではなく、現今の諸事情を考えて判断したことである。

○寒暖計華氏54度半(12.5℃)

以下は三月十七日【玉虫日付】に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)

『此の日は、明日サンフランシスコを出航するため、殊に嚴重に人数を検査する。始め太鼓・小鼓を打ち鳴らす。人数を揃え、その側に船長・士官兩人が並んで立つ。士官一人が中央に立って、その傍に医師一人が添って、士官が水夫一人ずつ

の名前を呼び上げる。水夫はそれに答えて帽子を脱ぎ、船長の前を通過する。その中で、病気があるものについては医師がその内容を報告する。非常に厳格である。そうではあるが、夷礼の粗雑な事はたとえ船長の前でも、唯帽子を脱ぐのみで、お辞儀はしない。これは考えるに、米国ではこの様な場合だけではなく、平日もまた船長・士官の別無く上下相交わり、水夫と言っても敢えて船長を重要視せず、船長もまた威勢を張らず、同輩の様に振舞う。唯、上下間の交りは非常に親密で、万一事あるときは各人全力を出してお互いに救い合う。苟(いやく)も凶事があるときは涙を流し頭を垂れて悲嘆する。一方、日本では礼法は非常に厳格で、従臣と言っても容易に御奉行に拝謁することは出来ず、その威厳は鬼神の様である。このため、少し位の下の者は、それより位の下の者に対して大いに威厳を張って、下の者を蔑視する。この規律格式は確かに厳格であるけれども、情交は日々薄く、たとえ凶事があっても外面では悲嘆の顔をしているだけである。上下の間はこの様であるから、万一事が起れば、誰が全力を尽くすのだろうか。これ国内の安寧が長く続いたための弊害なのだろうか。嘆かわしいことである。礼法を厳格にして、米国の様に上下関係を蔑視することなく、且つ米国の様に交情を厚くして、両国の良いところを取り入れる方法は無いものだろうか。自分【玉虫】は夷俗を敢えて尊崇する訳ではないが、今日体験した事情から判断して、自ら嘆息しているのである。』

旧暦万延元(1860)年3月17日(新暦4月07日) 【3月18日】 晴小雨、午後微晴、西南の風。【改元】

今日は碇を揚げて出航するので、米国人が頻りに出入りしている。午後4時頃に、音楽の演奏が終了すると碇を揚げた。日本及び米国の国旗を高く掲揚し、始め西に向って航行する。1kmばかり行った所でアルカトラス島の砲台で祝砲17発が鳴る。ポーハタン号でも同じく祝砲を発する。そこから2km程行くと海門を出ることになり、国旗を降ろした。此の時は既に夕方になっていた。景色を見るとところが無く、唯左右高い所に灯火が点々と見えるだけである。航行すること3時間位して南に向って航行する。南風なので帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関で航行する。夜、風波がやや烈しくて船が揺動する。

○寒暖計華氏56度半(13.6℃)

旧暦万延元(1860)年3月18日(新暦4月08日) 【3月19日】 晴、朝西南の風。午後西北の風。

朝、南に向って航行する。午後4時頃、南東に向う(東方二分方向《東南東》)。風は順風で帆を揚げる。午前10時前は風向が定まっていなかったので船が烈し

く揺動したが、午後は静かになり座っている様で、船のスピードは最も早くなった。

○寒暖計華氏56度(13.3℃)○正午迄117海里○北緯35度52分24秒○西経122度57分15秒

以下は三月十九日【玉虫日付】に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)

『自分は陪従中、最も低い役をしているので、船上で新見正使及び用役等の飲食の世話をしたり、且つ、器物の汚穢を洗ったりする。今、午後4時頃で食事時間であり、厨房所に飯を受け取りに行こうとしたが、数人が混雑して各人飯を受け取った。しかし、この時の御飯は御奉行等を除き皆冷飯であった。これを受け取った人は皆不平を鳴らし、暖かい飯でなければ受け取れないといって、一旦受け取ったものを返却してきた。自分は是を見て嘆かわしく思い、このことを書にして船上に張り出した。「此の次(たび)の米国行きは日本開闢以来未曾有の事で、米国に行き、威厳を示すことが第一義である。殊に船上は風波穏やかと言っても万里の波濤で危難に逢う事もあり、まさに戦場と同じである。どうして飲食の小事に心を費やす暇があろうか。この飲食は誰より賜ったものであるか、全て上様よりの賜物で一粒とても粗末には出来ない。船上の皆は何と考えているのか。」食事毎に色々の文句を言って炊夫を苦しめて、冷飯では食べることが出来ないとか、酒の肴が少ないとか、器物が汚いので食べられないとか、甚だしいのは残飯は豚・羊に上げ与えて暖かい御飯を求め、或いは菜物の味を美味しくしろと言う者も居る。その人物の資質を考えるに、平生は家で如何なる美味を食する輩か。多くは一汁一菜に過ぎないだろう。自分の家であれば食事の出費を惜しむが、此の場では俄かに奢侈(しゃし)の言を発して美味を好むは何事であるか。嗚呼(ああ)、万里の波濤を渉り来たれば、たとえ上位の者であろうとも、どの位の蓄えがあると言うのか。万一、危難に逢って日数を積んだならば、何を食料とするのか。この様なことを考えたならば、【米粒】一粒たりとも捨てるに忍びない。いわんや、日本魂の有る者が外国に来て、拘々(くく：こせこせ)として飲食の小事に心を砕く者が居ようか。もしそのようであれば、その心の鄙劣(ひれつ)さが知れよう。陸上でも、皆これに準じてその恥辱を現したならば、開闢以来未曾有の快事も却って不快事となるであろう。優れた人物も生きていけないだろう。此の次(たび)は陪従の徒と言っても、【上位の人は】その人を【陪従として】選択したのではないのか。そうであるのに、前記の様な次第ではどの様な面目があるのか。一行全員は皆心すべきことである。

自分はこの一件について、一人の官吏に相談したのであるが、その人は当時外国奉行定役を勤めていた人で、御奉行并にその他諸官吏の状況を良く把握しており、

自分の話を聞いて、大いに嘆息していた。【彼が言うには】このことは陪従に着いてのみの事ではなく、官吏でも終日唯飲食を務めとしていて、その部下では【飲食に心を使うのは】当然のことである。このことは常に嘆息するものであるけれども、これを口外すれば却って問題となるので、唯黙って【上位の人の】意に従っていると云う事である。嗚呼(ああ)、本当に【一行は】この様な状態であるから、米国の笑いものとなり、どうして威厳を輝かすことが出来ようか。嘆かわしいことである。』

旧暦万延元(1860)年3月19日(新暦4月09日) 【3月20日】晴、西北の風。

南東に向って航行(東方二分方向《東南東》)。風は順風で数帆を揚げる。船のスピードは早い。波は静かでまるで船遊びをしている様である。殊に外国の音楽を聞き、心が穏やかになり、大海原に居ることを忘れる午後2時頃、人数確認がある。夜、風波穏やかで、温暖さを感じる。

○寒暖計華氏63度(17.2℃)○正午迄250海里○北緯32度10分04秒○西経120度42分

旧暦万延元(1860)年3月20日(新暦4月10日) 【3月21日】晴、西北の風。

東南に向って航行。船のスピードは早い。連日、風波は穏やかである。午後船上で水夫数人が円陣を組んで古着を売買しているのを見る。その場所で尋ねたところ、横浜で死んだ水夫の古着を入札で値段を決め、高い値段を出した者に与えると言う事である。日本で言う「競り(せり)」の類のものである。忌み汚い衣服を競争で求める挙動は、日本と同様である。夜になって非常に温暖になった。

○寒暖計華氏64度(17.8℃)○正午迄240海里○北緯28度26分04秒○西経119度31分15秒

旧暦万延元(1860)年3月21日(新暦4月11日) 【3月22日】晴、西北の風。

東南に向って航行。午後、東方七分《東から11度15分南：東南東》方向に航行。連日、風は順風で、一行の喜びはこの上ないものである。この辺りでは日中、暑気を催す。

○寒暖計華氏65度(17.8℃)○正午迄210海里○北緯25度06分○西経118度25分15秒

以下は三月廿二日【玉虫日付】に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)

『夕方船上を散歩していたとき、自分の友人某が来て、サンフランシスコ滞船の時、中国人と筆談し、中国人が非常に丁重に待遇してくれて、米国の事情を教え

てくれたと話していた。その筆談のときに、「今回貴国にて米国と和親を締結したことは実に喜ばしいことである。此度米国は非常に待遇・親切に扱うであろう。しかし、この事を信じて用心しないと、終には米国の術中に嵌まってしまいうだろう。中国でも初めて和親を締結したときは、米国の待遇は非常に良好なものであった。しかし、今は既に雲泥の違いとなってしまう、中国を卑下すること犬馬の様で、婦人・子供と言っても蔑視するに至った。今はほぞをかんでも時既に遅く、慨嘆に堪えない。貴国も用心しないと後刻必ず卑下される。」との事であった。嗚呼(ああ)、此の一言を聞き、肝を冷やし、恐るべし。しかし、中国自らが招いた理由があるかも知らないので、実に日本としても油断するべきでない。そのため、今回の航海ではその事情を探るのを第一の目的とする。ただ、その任に当たる者は誰なのか。船中の日本人一行は皆、米国の親切さを喜び、いたずらに米国を尊崇して面目を失おうとしている。果たしてこのようであれば、どの様にしてその事情を探ることが出来るのであろうか。』

旧暦万延元(1860)年3月22日(新暦4月12日) 【3月23日】 晴、東の風。

東南に向って航行。逆風なので帆は揚げないで、蒸気機関にて航行する。午後に大砲の訓練がある。この辺りは海面が平坦で、まるで波がない様である。此処に来て初めて太平洋たる所以(ゆえん)が分かる。

○寒暖計華氏72度(22.2℃)○正午迄211海里○北緯22度40分39秒○西経115度34分

旧暦万延元(1860)年3月23日(新暦4月13日) 【3月24日】 晴、東北の風。

東南に向って航行。午後、大小砲・槍剣合隊の訓練がある。小砲隊を後にして前に槍剣隊を配置し、船上を往復すること数回、大砲は弾薬を入れ、砲台を回転させる。指揮は以前と同様である。風は順風でないが、横帆を揚げこれで航行するので、船のスピードは昨日に比べれば速い。風波は今迄で一番静かである。日中は暑気を催す。江戸の五月ごろの陽気である。

○寒暖計華氏74度(23.3℃)○正午迄202海里○北緯20度49分40秒○西経111度35分

旧暦万延元(1860)年3月24日(新暦4月14日) 【3月25日】 晴、東北の風。

東南に向って航行。風が止んだので帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関にて航行する。朝午前8時頃、右舷にソコラ諸島と呼ばれる小島2～3島が見える。日中は炎熱で、各人単衣(ひとえ)の着物を着る。江戸の六月頃の陽気である。十町【約1km】先に魚が飛び跳ねているのが見えるが、何と言う魚かは知らない。

一説にはサメの類と言ったり、ポウプ(英語名《Porpoise : ネズミイルカ》)と言ったりしている。その数が多くて、数えることが出来ない。夕方、舳先にブベ(英語名《boobyのことか : カツオドリ》)と言う水鳥が一羽飛来して羽を休めていたが、水夫がそれを捕まえた。大海原に時折この鳥が遠くに浮かんでいるのが見える。今、その形を見ると鵜の様でくちばしは長く、眼の下まで割け、羽は長さ一尺五六寸【約45cm】で色は赤黒である。足は鵜の足と同じで色は黄赤である。長さは大抵一尺七八寸【約50cm】である。太平洋の海原に多く居ると言う事である。夜、少し涼しくなったが、部屋は狭く熱臭が鼻を衝く。夜12時頃風が少し強くなり、2～3帆を揚げる。

○寒暖計華氏82度(27.8℃)○正午迄215海里○北緯19度07分○西経109度15分30秒

旧暦万延元(1860)年3月25日(新暦4月15日) 【3月26日】晴、東北の風。

東南に向って航行。風が止み、波が静かで帆を揚げるが出来ない。今日はソンテー(日曜日なり)で、船長その他まで衣服を着替えている。午前10時頃、士官から下官に至るまで船上に円陣を作り、中央に船長一人サーベルを帯して威儀を正し、法令を読み聞かせていた。それが終わり、再度人数を確認する。大抵、サンフランシスコで碇を揚げたときと同じで、太鼓に笛を交えて終了する。それから1時間程して半鐘をしきりに打ち鳴らした。その声に応じて、船長から下官に至るまで各々脱帽して船上に腰を掛け、下官等は腰を曲げたり立ったりして、皆バラバラである。そのうちに、神父が一人中央に立って聖書を取り出し、声高に聖書を読み出した。一読毎に賛美歌を演奏する。説教を聞く人々は大変感心した様子で、頭を垂れたり、顔を覆ったり、説教の声に応じてかすかに口を動かす者が居る。これは所謂キリスト教であろう(聖書を民衆に読み聞かせることは前にもあったが、今日は何時もと違っていたので、それを巻末に記述する)。日中の炎熱は燃える様で、夜になって少し涼しくなったが、安眠が出来ない状態であった。

○寒暖計華氏85度(29.4℃)○正午迄213海里○北緯17度35分12秒○西経105度51分15秒

旧暦万延元(1860)年3月26日(新暦4月16日) 【3月27日】晴、東の風。

東南に向って航行。風波が静かなのは昨日と同様であり、帆を揚げられないので蒸気機関のみで航行する。蒸気機関のみではあるが、連日の航行距離は200海里を下らない。今までの航行距離を振り返ると、順風の場合、200海里或いはそれに至らない場合もあった。現在は、風が無く蒸気機関のみの航行である

がその里数は変わらない。これは非常に不思議なことである。或る人の言うには、たとえ順風でも潮流には逆順があり、又波にも逆順があるので、船のスピードには遅速が出てくるとの由。さて、この辺りは炎熱が凄く、日中は船上でも凌ぐことは難しい。ましてや陸上での炎熱は推して知るべしである。午後4時頃、水夫小砲隊の訓練がある。夜になっても炎熱が止まず、一晩中戸を閉めることが出来ない。

○寒暖計華氏87度(30.6℃)○正午迄204海里○北緯16度13分15秒○西経102度38分

旧暦万延元(1860)年3月27日(新暦4月17日) 【3月28日】 晴、東北の風。

東南に向って航行。風波が静かなのは昨日と同様である。炎熱は益々烈しく、涼風も吹いて来ないため、室内に一時も居ることが出来ない。僅かばかりの涼風を求めて船上をさまよい歩く。午後4時頃、水夫小砲隊の訓練がある。此の頃は風波が静かなので、帆を張ることが出来ず、船上はそれ程忙しいということはないが、それでも遊んでいる者は居ず、船中の修復および諸具の破損を直して調整したりして、無駄に日を送ることは無い。感心と言うべきである。夜、炎熱が甚だしい。

○寒暖計華氏87度(30.6℃)○正午迄230海里○北緯14度47分15秒○西経99度04分
以下は三月廿八日【玉虫日付】に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)

『近日は風波が穏やかで船中頗る閑である。しかし士官・水夫等は少しも遊惰しない。その閑な時に船中の修復及び器械の破損を修理し、その他訓練等の事があって徒に日を送るということはない。このため、大風波があると言っても、直ぐに全防備して欠ける事が無い。且つ船中のみならず、その国も同じ様な制度になっており、日曜日以外、少しも遊惰せず、天文・地理その他万芸に努力・精進し、一つの事を発見すると互いに助け合って、その人の論功行賞とし、他人の行賞を奪うことは無い。常日頃この様であるので、もし急に風難があったとしても各人力を尽くし、その危難に対処して恐怖の気持ちを見せない。これは日常治乱一般に気を付けて用心しているからであろう。いわゆる治に居て乱を忘れずである。日本は二百年來の太平が続き、何事も因循苟且《いんじゅんこうしよ：旧慣に拘泥して改めないこと》して、仕事において更に向上しようとする者が居ない。もし向上しようとする者が居るとしても、唯名利を求めて実用にならない。もし一寸した時間が得られれば昼寝・飲酒して、その懶惰【らんだ：怠惰】は言うに及ば無い。そのため、少し事あれば皆人狼狽してその処理が出来ない。たまたま志有る者は後世の弊害を考えて、種々の方策を進言すると、他の人から愚人或いは狂

人と誹謗され、何処にその志を伸ばすことが出来るのか。今、米国人の精勤、且つ相互扶助の精神を見れば、【自分は】心に恥じ入るばかりである。』

旧暦万延元(1860)年3月28日(新暦4月18日) 【3月29日】 晴、東北の風。

東南に向って航行。正午に日陰の長さを測るため、一尺【30cm】の扇を船の中央に立てたところ、その陰は僅かに五六分【15cm】であった。明日は太陽の直下となる。このため、昼夜焼けるような暑さで、流れる汗を拭くのに暇が無いほどであった。部屋になどじっとしてられない。唯、時たま大海原から涼風が吹いて来て、暫らく炎熱を払拭してくれる。さて、炎熱になって以来、日本の風俗で単衣の着物を着るのは勿論であるが、或る者は裸になり、或る者は肌を脱ぎ、或る者は裳(もすそ)をたぐりあげしている。寝るときは、上半身裸になったり、甚だしいのは裸で十文字になって寝ている。米国人はこれらを見て大いに笑っている。米国人はたとえ大暑であっても少しも肌を見せない。もし肌を出す者が居れば、大いに軽蔑する。このため、下官であってもツツボー(搾袖衣)・股引を着用し、肌を出すことは無い。良い慣習と言うべきである。夕方、西北の方向に雷雲が発生し、雷光がしきりに光る。このため船上には除雷の設備としてライトニンズロート(米国名で除雷と言う様である)と言うものをマストから海中へ下げている。その器械針の先端は15cm程メッキされている。これをマストの先端に立て、それに鉄の鎖を接続して、鉄の鎖を海中へ垂れ下ろしている。これで落雷の憂いが無いと言う由。自分はそれが何故なのか理由は分からない。奇妙な方法である。

○寒暖計華氏89度(31.7℃)○正午迄215海里○北緯13度14分47秒○西経95度36分30秒

旧暦万延元(1860)年3月29日(新暦4月19日) 【3月30日】 晴、東北の風、午後東風。

東南に向って航行。北風のため横帆を揚げたが午後になって東風に変わったため、帆を降ろした。波濤は前日に比べると少し高い。早朝午前6時頃東の方向に月を見る。その形から判断するに初弦《弓張月》の様である。日本と昼夜一日の違いがあることを知るべきである。今、11時(四ツ半)。いわゆる太陽直下を通過するが、涼風がしきりに吹いてくる。又、薄雲が一面天を覆っているため、前日の炎熱に比べれば、凌ぎ易くなっている。寒暖計は85度に下がっており、以前に聞いていたのとは大分違っている。夜、非常に蒸し暑く、日中より大変である。

○寒暖計華氏85度(29.4℃)○正午迄250海里○北緯11度53分47秒○西経92度15分

旧暦万延元(1860)年3月30日(新暦4月20日) 【閏3月01日】 晴、東風。

東南に向って航行。風波は静かであるが、前日に比べると若干強くなっている。正午に日陰の長さを測るため、一尺【30cm】の扇を船の中央に立てたところ、その陰は南の方向に二分【6cm】であった。太陽が北から射していることが分かる。午後2時頃、蒸気機関のネジが破損したため、修復するのに蒸気を止める。2時間ほど洋上を漂流する。午後4時頃、水夫小砲隊の訓練がある。今日の訓練は、水夫全員で、一隊毎に士官一人サーベルを下げて側に居る。一隊の人数は大小で定まっていな。考えてみるに、平日教示する士官が自分の部隊を引率しているのだろう。【士官の力量により人数にばらつきがあるということか】 総計四隊、縦列している。第一等の士官が総指揮役となり、船の中央、蒸気機関の上に高い建屋があり、その上で指揮している。2時間程船の前後を周回して、或るときは一列になり、或るときは二列になることが数回に亘り、太鼓・笛で前進・後退を決めている。この行動は乗船後初めて見るもので、見学に値するものである。今日は太陽の直下を離れること未だ遠くないので、炎熱は厳しい筈であるが、逆に冷気が吹いて凌ぎやすい。以前に聞いた話では、太陽直下は極熱で通常の人では耐えることが出来ないとされていた。今、太陽の下を通過しており、その説がかえっておかしいと言える。しかし考えてみると、海洋と大陸の違い、或いはその場所の地形に拠るものだろう。夜、冷気が吹いてくる。

○寒暖計華氏81度(27.2℃)○正午迄200海里○北緯10度30分06秒○西経89度07分30秒

旧暦万延元(1860)年閏3月01日(新暦4月21日) 【閏3月02日】 曇、朝東風、午後東南の風。

東南に向って航行。午後、東南東に航行する。朝は東風で、帆を揚げる事が出来ない。正午頃東南の風に変わり、横帆を揚げて航行する。午後2時頃、船長が船の中央に立って指令文を読み、士官・水夫等全員に聞かせる。その様子は以前と同じである。又、小砲隊の訓練がある。今日は薄曇が全天を覆っていて、日光が遮られ且つ風が強いけれども、蒸炎で部屋に居ることが出来ない。夜、小雨。雷光が盛んに西北の方向で光る。

○寒暖計華氏85度(29.4℃)○正午迄180海里○北緯09度23分47秒○西経86度22分30秒

旧暦万延元(1860)年閏3月02日(新暦4月22日) 【閏3月03日】 曇、東北の風。

東南に向って航行(東より二分ほど南へ向う)。風波が静かなのは平坦な道を行っている様な感じである。今朝から船の左舷に群山が点々と見える。これは中央アメリカのデュルス《Golfo Dulce：コスタリカの一部》と言う場所である。午前10時頃、水夫が一羽の小鳥を捕まえた。その形はシギに似て、くちばしの長さは約2.4cm程、色は黄色で羽は茶色と白の斑である。尾は短くて足は長く、その色は青黄である。みずかきが無いので海鳥ではない。全体の長さは八分【約23cm】である。その名をポリィ《Polly》と言う。又、二三日前より船の左右に小鳥が飛来するのが見える。その形は明らかではないが、日本で言うイワツバメと言う類の鳥であろう。陸地が近いことがこれで分かる。今日はソンテー(日曜日)で、その儀式は以前と同じである。米国では日曜日になれば全員が職業を休み、衣服類を着替えて一日中遊樂するとの由。それ故、その日は船中でも同じで、風波が穏やかなので聖書を読み解き、且つ酒宴をして楽しんでいる。午後2時頃、東北の方向に軍艦一隻が見えた。米国の船と思い、急にその方向に船を航行させたが、残念ながら英国の船であった。お互いに船号を唱えて談話をする。その距離僅かに二十間【約18m】であるが、日本人には彼等の言語が上手く通じないので、何を話しているのかは分からない。唯、パナマ港に米国船が二隻程滞留していると言っているのを聞いた。お互い脱帽して礼をし、早々に英国船から分かれた。我々が乗っているポーハタン号は東南方向に向け、英国船は南西に向って航行する。暫らくして英国船の帆影が微かになってしまった。夜、小雨。雷光がある。

○寒暖計華氏84度(29.4℃)○正午迄240海里○北緯07度42分○西経82度43分

旧暦万延元(1860)年閏3月03日(新暦4月23日)【閏3月04日】晴、東の風。

今朝になって東北の中心に向って航行する。暁午前2時頃、にわか雨が降り、午前6時頃になって止み、快晴となる。午前8時頃左舷に群山が連綿と見える。遠くは数十里【約80km】、近くは3～4里【約6km】の距離で、樹木が繁茂しており、その間小島が点在して見える。それらは皆岩石である。この辺りはニカラナダ《ニューグラナダ》領ヒッセル《Morro de Puercosか》と言う場所で、ここより少し北方に岬があるが、その名前を聞かなかった。午後2時頃、南方に船が一隻航行して行くのが見えた。マストが3本あり、西方に航行して行った。遠くなので何処の国の船であるかは分からない。午後4時頃、前述の岬を過ぎ、北へ航行する。夜、月を見ると日本で見るより少し低く見える。これは時節の違いによるものである。

○寒暖計華氏86度(30.0℃)○正午迄200海里○北緯07度03分○西経80度20分30秒

旧暦万延元(1860)年閏3月04日(新暦4月24日) 【閏3月05日】晴、午後2時頃俄か雨、東北の風。

今朝になって北西の方向に航行する。午前6時頃、海門に入る。太陽はまだ昇っておらず、辺りは暗闇である。このため、合図として一砲を発し、且つ照明弾を発する。その後、日米両国の国旗を高く掲揚した。2時間程してパナマ港に入る。この港は水深が浅く、接岸することが出来ないため、二里程離れた処に碇を下ろした。その後、祝砲を発し、且つ音楽を演奏したので、滞留していた米国の船舶がその祝砲に応じて答砲した。ポーハタン号の船長・士官等が各自の礼装に着替え、小型船に乗って上陸する。2時間程経って米国人が乗船しに来了。その内に女性一人が居た。彼等は皆、この港に在留、或いは滞船の人達なのだろう。引き続いて祝砲を発して音楽を演奏し、彼等を饗応する。これは米国人の慣例の儀式と見え、どの港に碇を下ろした場合も同じである。さて明日は上陸する。蒸気機関車でこの地を移動するため、今日荷物を運送しようと米国の運送船一隻が来た。これに荷物を積込むが、混雑があり、しかも炎熱が烈しく汗が滝の様に流れて苦しむ。午後2時頃、漸く荷造りが一段落着き、各人部屋に入って休息していたが、天候が急変して盆をひっくり返したような俄か雨が降り、その後に涼風が盛んに吹いて来た。2時間程して晴れ上がり、このため炎熱が和らぐ。これは天の助けか。夜も同様、涼しい。天候快晴で、満天に星が輝いている。多くの蛍が飛び交い、虫の声が辺り一面に聞こえ、その風景は日本の初秋に似ている。思わず里心を感じる。

○寒暖計華氏86度(30.0℃)○昨日正午よりパナマ港迄130海里○北緯08度57分○西経79度31分

【巻二 終】